

釣りに釣られて

高原英夫

第十回 『魚』の漢字

漢字というから、中国の漢王朝の時代の文字が日本に伝わったからそう呼ぶのかというとは、そうではない。いわゆる広く中国という意味での漢の文字というわけだ。実際、漢字は千五百年くらい前に伝わってきたというから、漢王朝は西暦二百年にとづくに終わっている。

私は大修館書店発行の「漢語林」を愛用している。もう二十年は経っているだろう。特に巻末の故事成語索引が良く、いろいろと教えてもらっている。またもうひとついいのが、漢字の現代の中国語読み、ピンインが示してあることだ。

始めから寄り道話となるが、あの空海が入唐したのは西暦八百四年のことで、わずか二年で密教の秘法を授けられ、帰国し真言宗の開祖となり、亡くなってからの名前、諡名（おくりな）を弘法大師と呼ばれ敬われている。その弘法大師の幼名が「佐伯真魚」というのだ。「まお」と呼ぶのだそうだが魚を「お」と読んでいる。真

魚とは何か魚の名なのだろうか。小説「空海」の中で著者の稲垣真美は、

「海辺で生れたからそんな名前だ……」と真魚に言わせている。少し肩透かしな感じだ。

一度、高校生にでも戻ったつもりになって、漢和辞典を広げて見て欲しい。そして「魚」を見ると漢ギョ、呉ゴという表示がすぐ下に書いてある。つまり「さかな」と「うお」というヤマトコトバに、中国に渡った日本人がその漢字を当てはめた時の読み方を日本人の耳で聞こえた読み方として取り入れてきた「ギョ」と「ゴ」という読み方という訳だ。特に呉は、昔の中国の呉の国の四、五世紀ごろの読み方で、仏教用語にその読み方が伝わっているとされている。例えば「明」の字だが、これがわかりやすい。つまり、明治の「めい」、明日の「みょう」、明朝の「みん」と、上から漢音、呉音、そして更に唐音の読み方として日本人は使い分けていることになる。呉音はどこかやわらかい発音だと言われている。建立（こんりゅう）、老若男女（ろうにやくなんによ）などがそれだ。

さて漢字だがおよそ五万字あるといわれているそうである。普通の漢和辞典では一万字位が載っていて、実際使われるのはその半分だといわれている。そして、その中で魚のつく漢字の話だ。私の「漢語林」には百十五あまりの魚偏の文字が見える。この辞典はおよそ千五百ページになる。

一方、これも私が持っている昭和五十七年三月一日初版発行とある「現代中国語辞典Ⅱ香坂順一著」には魚偏が百二十五文字あった。この辞典は二千ページほどもあり、文字も小さく、全体の収録数は明らかに多い。その中でほぼ同じくらいの文字数というのは、あの漢字の国に対して、海に取り囲まれた日本としてあたりまえというべきだろうか

漢和辞典には「国字」という表示がある。ここが日本の日本たるところである。酔いながらだが数えてみた。あるある。つまり国字とは、日本人が作り出した漢字というわけだ。「鮠(このしろ)」「鮓(めばる)」「鯛(あさり)」「鰻(うぐい)」「鯰(なまず)」「鱈(ほっけ)」「鰯(わかさぎ)」等々、いえばなんだか寿司屋によくあ

る湯のみ茶碗に書かれている魚偏の日本語版製というところである。しかも加えて、もともと淡水系の魚種である漢字を日本語では海水系の魚の名前にしてしまっているものもたくさんある。「鮪（まぐろ）」などはもとの漢字の意味はチョウザメの一種だというし、「鱒（ぶり）」はもとは毒魚の名とあつて、今日本で使っている漢字とは全然意味が違っている。日本がいかに海にかこまれていてそれを表わす必要があつてきたのかがよくわかる。

さてまた話は飛んで、スシ屋というが、「寿司」も「鮓」「鮓」という三種の表し方がある。寿司はあて字だとわかるが、「鮓」は、「しび（鮓）」の大きなものという意味もある。そして国字として酢を加えた飯と、魚肉とを合わせたものとなり、やつといま食べているスシという文字と重なる。それにしても鮓が三段論法のような話だがマグロとつながるとは、日本人が大好きな訳もよくわかる。

ついでだが中国語でマグロは「金枪魚（ジンチイアンユイ）」というのだという。金の槍の魚というわけだ。もつとも「枪」は「銃」という意味でも使っている方が

多いが、先の鋭った魚ということだろうか。でも実際イルカとかもつと先が鋭い姿のものもいるわけで、なぜこの名になったのか、私の中国語の先生はわからないと言つて手のひらを上にして両手を上げた。

ところでこの三年、築地の魚市場の初セリで、銀座の有名なスシ屋さんと中国に展開するスシ店が協力してマグロを競り落としたということが話題になった。残念なことには今年に向いの戸井のマグロに三四二キロ、三二一九万円の最高値がついた。ところで寿司の文字は私の中国語辞典には出てこない。でも先日、中国語会話のテレビ番組を見ていたら、寿司を「シヨウスー」と発音して話をしていた。もともと中国の人は生の魚は食べないとか聞かされてきた者にとって、まさに世界は変わりつつある。

さてまた話をころがそう。あの鑑定番組の中で、出品されていた確か壺だったと思うが、その壺に魚が描かれていた。すると鑑定人は魚は「ユウ」と発音する、遊ぶも「ユウ」と読み共通する。したがつてその凶柄がとくに喜ばれるというような

説明をしていた。はじめの漢・呉に戻るが、魚は「ギョ」とか「ゴ」であっても「ユウ」というのはいかと思ひ「漢語林」で見してみた。なるほど魚をあえてカタカナで書けば「ユイ」だろうか、現代語読みが書いてある。一方の「遊」は簡略化し「游」となり「ヨウ」となっていて何か似た発音の様だ。日本人がいつの時代か「ギョ」と聞こえていた魚の音が、今では「ユイ」なんだそうである。文字の国の発音の移り変わりと、かたくなに守る日本の対比が本当におもしろい。正確なことは知らないがいつかの時代、同じ読み方だったのだろう。鑑定人の博識にはおどろいてしまう。道はいろいろと通じているものなのだ。

また国字の話に戻る。

「凧(なぎ)」「鯛(いわし)」「鱈(たら)」「鯛(はたはた)」「これも「鱈(はたはた)」「鱈(きす)」等々、改めて日本ならではの漢字が、季節と魚の関係や、自然の風情をうまく表わしてくれている。

私は溪流釣りもするので、淡水魚にもふれておこう。私はイワナはやつぱり「岩

魚」がいい。山奥へ岩場を登り竿を出すのにふさわしい名前なのだが、辞典には「鮭」と書いている。今でも中国では「ウェイ」と呼んで釣っているのだろうか。「鮎」はナマズのことだそうだ。鮎釣りはやらないが、ナマズはちゃんと「鯰」の文字を日本で作ってしまったっている。どうやら留学僧が「鮎(なまず)」を「あゆ」に間違えて訳してしまったというのだ。当然ナマズの字がなくなる。そこで「占」は「粘」で、ねばっこいという意味なのだが、魚偏に音の似た「念」をつけ「鯰」としナマズにしたということらしい。

昨年のある日、市内のスーパーのチラシをなんとなくがめていた。サンマが不漁で、一匹三百円近いという話がテレビでされていたので気になっていたのだ。がそこに一尾何十何円と百円以内の値が書いてある。冷凍ものなのか、今年とりたてのものかはわからないが、いわれているよりは安い。実はその値段のことではない。「一尾」としつかり書いてある。私はこれまでの文中でも、普段でも量詞として、「一匹」とだけ書いていて「一尾」などとは滅多に言わない。イカだつて一杯と数

えるのだが、何かひけらかすようで一匹、二匹と言ってしまう。

ところで「匹」と「尾」の違いは何なのか。私の持っている第四版の「広辞苑」では、獣・鳥・魚・虫などを数える語と書いてある。「尾」は魚を数えるのにいう語とあり、特に区別がわからない。そうしていたら、カシオの電子辞書の中に小学館の「数え方の辞典」を見つけた。そこでは、生きている魚は「匹」で数える。主として釣りの獲物や鮮魚店等で商品として取引される魚、料理の材料となる魚を「尾」で数えるとある。なるほどわかりやすい。なお中国では魚を量詞では細長いものを数えるものとして「条(ティアオ)」を使う。河とかズボンとか街の通りを数える時と同じだ。

私は二千年に、仕事としては少し大きな仕事をした。二千年とはつまり二十世紀最後の年である。二十世紀の掉尾を飾る仕事として社の評価をもらった。ところが「掉尾」とは、魚が最後になって勢いのよいことで、どうも最後をはでに飾るというよりは、土壇場のひと暴れとでもいおうか、随分と意味が違っている気がする。

ついでにもうひとつ、中国では

「今天釣了一条鯪鱼」

と釣りから帰つて言う時があるという。「鯪鱼」って何の魚なのだろう。実は「鯪」の字は中国語では「零」と同じ発音で「リン」と読み。「今日は釣れた魚はゼロ」との駄洒落の言い方なのだそうだ。文字の国ならではの言い回しである。

一生の趣味だろう魚釣り、そこにしつかり寄り添っている漢字たち。いっぱい使つてやりたいのだが、なかなかこんな機会でもないと改めて漢和辞典を読む機会がない。漢字の文字の大海に、魚と遊ぶのも雨の日にはいいのかもしれない。

平成23年4月